

---

# 海上日記

沙紅羅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

海上日記

### 【Nコード】

N4687J

### 【作者名】

沙紅羅

### 【あらすじ】

はるか彼方まで続く「ソンムル海」

その海上で暮らす者たちがいた。

若き女頭サラサ率いる「ツィヴェ号」で、彼女らはにぎやかに日々を過ごす。

しかし、【アフエラン国】で2人の兄弟との出会いがサラサ達を思わぬ路へ誘う……。

## プロローグ【待ち続ける者】

緑の楽園。透明な清き水。秘密の洞窟を隠す巨大な滝。

その洞窟の中で、紅い瞳が煌きらく。

もう少し。もう少しで、刻ときが訪れる・・・。

もうすぐで、我が主がお戻りになられる・・・っ。

紅い瞳をした巨大な影は、その刻を待ち続けるように、そっと瞳を閉じた・・・。

「あなたは、ラプカの実が好きだったね」

オレンジ色の実を一口かじり、少女は微笑む。

巨大な影が潜む洞窟の外から見上げる夜空は、絶景だ。

「・・・待っている。あなたが来るのを」

悲しみの光を湛たえ、少女はどこかに居る大切な者の名を呟いた。

その呟きは虚空へ消え、静寂が辺りを包み込む・・・。

## 登場人物紹介

サラサ<sup>II</sup>アージ <女>

この物語の主人公。

ツ<sup>II</sup>ヴェ号 の若き女頭。

明るく、思いやりがあるので船員（部下）からとても慕われている。幼い頃、行方不明になった肉親をずっと探し続けている。容姿は赤髪に黒い眼。

由来<sup>ゆい</sup> <女>

ツ<sup>II</sup>ヴェ号 の乗員の中では最年少。

サラサを姉のように慕う。

風詠みの天才。

容姿は白髪に緑の眼。

ナクル<sup>II</sup>コーレア <男>

【アフエラン国】でサラサと出会う青年。

最初は無口だったが、次第に打ち解ける。

元奴隷で、過去に秘密がある。

容姿は黒髪に青い眼。

ノルフエ＝コーレア <男>

ナクルの弟で、兄と共にサラサと出会う。

内気だが、責任感がある。

元奴隷で、過去に秘密がある。碧の指輪を持っている。  
容姿は黒髪に同色の眼。

アリア＝アージ <女>

サラサの姉で、彼女に瓜二つ。

水幻郷で翠龍と共に居る。

物語後半で登場する。

翠龍<sup>すいりゅう</sup>

水幻郷を護る龍。

碧の指輪を持ったノルフエを主と認めている。

話し相手であるアリアには感謝している。

ジルド <男>

ツィヴェ号船員その1。

船員達の中でもっとも大きな体格の持ち主。

豪快な性格だが、仲間を思いやる気持ちは誰よりも強い。

トルテ      <男>

ツィヴェエ号船員その2。

サラサを姐さんと呼び慕う。

潜水が得意で、長く息を止める事が出来る。

ハイン      <男>

ツィヴェエ号船員その3。

サ・カジユ<良き海賊>になる以前は本屋で働いていた。  
因みに眼鏡をかけている。

ウィル＝リバース      <男>

【大帝国ラフラゾーン】でサラサ達と出会う青年。  
見た目チャラけたような感じだが、これでも將軍。  
部下からの信頼が厚い。

サ・ヴァロン<悪しき海賊>を取り締まっている。

リオナ＝ロダット      <女>

【大帝国ラフラゾーン】でサラサ達と出会う女性。  
ウィルの従姉<sup>いとこ</sup>で、剣士。

『アルメドの戦士団』所属。

昔、サラサとアリアに会った事がある。

ムト <男>

ウィルの側近。

記憶力が良く、小さな情報でも見逃さない。

ローア <女>

リオナの第1部下。

リオナを尊敬し、常に彼女の傍らにいる。

実は王族出身である。

## 登場人物紹介（後書き）

多分まだ増える可能性があります。

## 1章 【出会い】

「頭あ！もうすぐで【アフエラン国】だぜ〜！」

双眼鏡を片手に、髭を生やした大男が甲板に佇んでいる少女、サラサに声をかける。

サラサは彼に軽く手を上げて返事をする、船長室の中に入ってしまった。

波でゆらゆらと動いているが、彼女は少しもふらつくことなく部屋の端の椅子に腰掛けた。

（あそこで食料と水を先に手に入れてから「情報」を収集しないと、な・・・）

テーブルの上に置いてある紅茶を一口飲むと、ドアがノックされた。

「どうぞ」

「失礼します」

ドアを開けて入ってきたのは小柄な少女。

片手には小さな紙が握られている。

「サラサ、【アフエラン国】を発つのは明日の午前中のほうが船は良く進むよ」

「ありがとう、由来。今後の天候は分かった？」

「うん。2日後には雨が降るかもしれない」

「ご苦労様。休んで」

由来が船長室から出て行くと、サラサは窓から見える大海原に視線

を移す。

空を飛ぶ白い鳥が、水中にいる魚を狙って水の中に飛び込むのが見える。

不意に、船の動きが遅くなった。ああ、もう着いたのか。とサラサは窓の外から視線を外し、船長室を出た……。

## 【アフエラン国】

ツウヴェ号が碇を落とした場所は、港から数キロ離れた岩場。港の方は異国からの船や商人らの船で渋滞状態だ。

それに、サラサ達は『海賊』だ。真つ向から港に入るなど、ある意味自殺行為に近い。

けれど、サラサ達は『良い海賊』だ。盗みはしないし、人も殺さない。

ある目的があつて、海賊をしているだけ。

どうして、海賊は批判されるのだろうか？とサラサは疑問に思う。

そんな組織を造ったのは国がちゃんとしなからだろつに……。

そんな思いを打ち消したのは、船員の声だった。

「頭あ！今晩は御馳走にしようぜ！」

「バツカ、なに考えてんだよ！早くメシの調達に行くぞ！」

4、5人で1チーム、計4チームが分かれて水と食料などを調達しに行く。

甲板に残されたのはサラサと由来だけ。

「サラサ、私は森の風を聞いてくるけど、あなたはどうするの？」

「・・・・・・・・散歩してくるよ」

由来は森へ、サラサは街へ、それぞれ踵を返した・・・・・・・・。

「そのこの嬢ちゃん、ヘブレの実はいらんかね？」

「ひとつ貰うよ」

甘酸っぱい味のする果物をひとつ買い、サラサはぶらぶらと街の裏側を歩いていた。

この辺は表とは違い、商人達の数が少ない。

そして何より、裏の商売が潜んでいる。

ふと、どこかで誰かの怒声を聞いた。どうせなにか揉め事でもあったのだからと、サラサは無視して歩を進めたが、直ぐその角から、2人の人間がサラサにぶつかってきた。

「退け・・・・・・・・っ！」

ぶつかった相手は、ボロ布を被っていて顔はよく見えなかったが、綺麗な眼をしていた。

けれど、怯えていた。

2人の人間のうち、1人は由来のように幼い少年だった。

ぶつかった青年は少年の手を引いてサラサの横を足早に過ぎていく。

「あ、いたぞ！捕まえろ！」

彼らが角を曲がるうとした時、サラサの後ろから白髪の男が息を切らせてやって来た。

その後ろには、1人の若者が居る。親子だろうか。

若者が先に走り出し、白髪の男がその後を走る。

「あいつら、捕まえたら地獄に連れて行ってやる……っ」

男が、サラサの横を過ぎ去る時にぽつりと呟いた。

なるほど、さっきの2人はこいつらに追われているのか……。そう思い、東の間その場に佇んでいたサラサは、走り出した。

「兄ちゃん、追いつかれちゃうよ……っ」

「頑張れ、もう少しだ……っ」

行くあてもなく、青年は少年の小さな手を握ってひたすら走り続けた。

けれど、この街……。特に裏の方は道が入り組んでいて迷路のようになっている。

表に出るのは難しい。

数メートル先にある角を曲がろうとした時、後ろがぐんっ、と引っ張られた。

「兄ちゃん！」

「……っ!?!?」

「ふふ、そこを動くなよ。大人しくこっちに戻れ」

若者が、少年の頬に短剣を向けている。青年は舌打ちをして少年に視線を移す。

少年は、眼に涙を浮かべ、青年を見つめていた。けれど、今の状況では少年を助ける事は出来ないし、戻ったとしても、待つのは……

……。つう、と背中に冷たい汗がはしかった……。刹那、若者の顔に黄色い物体が勢いよく当たった。

「・・・うわっ！何だ・・・っ！眼が・・・っ」

若者は少年を突き飛ばし、必死に目を擦った。少年はよろけながらも青年のもとに駆け寄り、抱きつく。

一体何が起こったのか分からず、呆然としている青年に上から声がした。

「こっちだ、走れ！」

陽に映える、赤髪・・・。

一瞬だけ、青年はその赤髪に見惚れた。が、サラサが早く！と急がし、青年は少年を抱きかかえて走り出した。

## 2章 【これから】

ツィヴェ号のある岩場の近く。サラサと2人の兄弟は地面に座り込んで息を整えていた。

青年に抱きかかえられていて、全く息があがっていない少年は青年の傍で心配そうにサラサを見やる。

少しして、青年が立ち上がった。そして、ボ口布を外す。ふわり、と海からの風に黒髪が舞った。

「礼を言う」

「ありがとう、お姉ちゃん」

「どういたしまして。それより、あんた達追われていたけど・・・盗みって訳じゃあなさそうだね」

その言葉に、青年は黙り込み、少年はおろおろとサラサと青年の顔を交互に見つめている。

束の間の沈黙を破ったのは、街の方から食料調達を終えて戻ってきた船員達の声だった。

「たくさん仕入れてきましたよ！」

「これなら数ヶ月分は持つぜ！」

「・・・っていうか、誰だ？そいつら」

じろじろと、彼らは青年達に視線を向ける。少年を庇かばうようにして背に隠し、青年は彼らをキツと睨んだ。

それを見て、サラサは船員達に声をかける。

「ご苦労。倉庫に運んどいて。ほら、早くするー！」

へい、と声を揃そろえて返事をし、船の方に歩を進めていく。彼らがその場から居なくなっただ後、サラサは青年ににっこり笑いかけた。

「あんた達、行く場所ないなら、一緒に来るかい？」

「……どこに」

「あたし達の船さ」

船？と青年が聞き返すと、サラサは腕を組み、頷く。

「取り敢えず、返事を聞こうか？来るか、来ないか。どっち？」

しばらくの間、青年は黙った。そして数分後、少年をふと見下ろしてから、サラサに目を合わせ、頷いた。

サラサはそう、と呟き、彼らにこっちに来るよう手招きし、岩場へ向かった。

「これが、あたし達の船、ツィヴェ号だ」

甲板に上がり、2人は甲板から見える景色を眺めた。

あちらこちらに、先程の男達がいる、何やら物を運んでいる。

「姐あねさん、調達した物はほぼ倉庫に入れておいたぜ」

「わかった。トルテ、甲板に皆を集めて」

「へい！」

トルテと呼ばれた青年は駆け足で船内に向かった。

ふと、サラサは何かを思い出したように彼らに向き合う。

「そついや、名前をまだ訊いていなかったね」

「………ナクル」コーレア。こっちはノルフエ」コーレア……弟だ」

「初めまして」

「よろしく」

「あなたは……？」

「あたしはサラサ」アージだ。この船の船長をやっている」

数分後、甲板には船員全員が集まっていた。

一段高いところにサラサとナクル達は立っている。

サラサが船員を見渡し、口を開いた。

「わざわざ集まってもらってすまないね。急だが、仲間を紹介する。ナクルとノルフエだ」

船員達のなかから、歓声が沸きあがった。

皆、彼らを迎え入れているという証拠だった。

ナクルもノルフエも少したじろいでいたが、嫌ではなさそうだ。

「じゃあ、解散！ 歓迎会は夜やるから、皆持ち場に戻る！」

再び、甲板が静かになり始めた頃、サラサはナクルとノルフエの方を見やる。

「後で部屋に案内するよ。それまでここで大人しくしてて」

それだけ言うと、小走りでその場を去った。

残された兄弟は、甲板から見える海を見渡す。

「兄ちゃん、あの人達・・・悪い人じゃなさそうだね」

「・・・・・・・・ノルフエ、「アレ」は持っているか？」

勿論だよ、とノルフエはくすんだ服のポケットをぎゅっと握る。

それを横目で見て、ナクルはそうか、と呟き、再び海に視線を戻す。

あの女を、信じたわけじゃない。

でも、ここから出られるなら、どんな手段だって選ばない。

必ず あの場所 へ行くために、決して死にはしない。

拳を強く握り締め、ナクルは彼方<sup>かなた</sup>まで続く海を見つめた・・・・・・・・

## 2章 【これから】（後書き）

最後までナクル視点です。

### 3章 【サ・カジュの者】（前書き）

ほとんどがナクル視点で書いています。

### 3章 【サ・カジユの者】

「ノルフエ、海を見るのは初めて？」

「うん。青くて、どこまでも続いているんだね」

「海の中はとても神秘的よ。海について、教えようか？」

由来の案に、少しばかりノルフエは戸惑ったが、やがてコクリと頷き、彼女の話に耳を傾けた。

そんな光景を、ナクルは少しばかり離れたところから見ている。

甲板の上には4、5人の船員が居て、それぞれ自分の仕事をしているた。

ノルフエ達から不意に目を逸らし、ナクルは空を仰ぐ。

心の奥では滲んだ気持ち<sup>にじ</sup>がせめぎあっている。

サラサ達が海賊だと知ったのは、助けてもらった日の夜だった。

ハインという船員が、ナクル達に言った言葉……。

『お前達の命は俺等が保障してやるよ。なんたって、サ・カジユ<良き海賊>だからな！』

あの時は驚いたが、今思うと、納得が出来た。

サラサの事を、「頭」や「姐さん」と呼んでいた理由が、分かったからだ。

海賊の頭なら、そう呼ばれていてもおかしくはない。

それでも、ひとつだけ疑問に思う事がある。

彼女は、何故海賊の頭になったのだろう？

確かに、あの明るい性格は海賊の頭と呼ばれても可笑しくない。でも、何が理由で、そうなったのか、俺には理解出来ない。

でも、サ・カジユ<良き海賊>なら、俺やノルフエに危害は加えない。

問題は、俺達の目的について、だ。  
俺達は、ある場所へ行かなくてはならない。それが何処にあるか、  
なんてのは分からない。

探さなくてはならないのだ。たとえ、何があっても……。

「ああ、ここに居たのかい？」

「………何か用か？」

無表情で返事を返すと、サラサは苦笑し肩を竦めて俺の隣となりに佇たまたみ、  
前を見据えた。少しして、口を開く。

「船の上には慣れた？」

「まあ、な」

「素っ気ないねえ。ま、気にしないけど」

「お前達は、何の為に海賊を？」

どうせ答えないに決まっている。そう分かっていて、問うた。  
だが、彼女は俺を見てまた苦笑した。

「一言で言えば、探している人がいるから」

あっけなく、彼女は返答した。あまりのあっけなさに俺は呆然とし  
た。

いくらサ・カジユく良き海賊だからといっても、そう簡単に旅の  
目的を教えるなんてことはまず有り得ない、と俺は思っていた。

「あいつ等にはただあたしの人探しを手伝ってもらっているだけで、  
申し訳ないんだけどね」

赤髪を片手で掻きあげて、サラサは甲板にいる船員を見渡した。

俺は、いままで海賊の頭は強欲な者だとばかり思っていた。けれど、彼女のような者も居るのかと、初めて思った。

彼女になら、教えても良いと、そんな思いが込み上げてくる。けれど、俺は言わなかった。

まだ、心から信用したわけじゃ、無い。

「頭あ、ちよつと来てくたせえ！」

「分かった！……ま、気楽にいなよ」

ポン、と軽く俺の肩を叩いて、サラサは向こうに去って行った。

海力モメが1羽、近くの縁ふちに止まる。特に怖がる様子は無く、口ばしで毛繕けつくろいをし、また飛び去っていった。

「……海と空は、同じ色だな」

特に意味は無いが、ただ、そう思った。

3章 【サ・カジユの者】（後書き）

なんか終わり方が微妙な・・・。

## 4章【無人島で】

【アフエラン国】でナクルとノルフエを助けてから、3日が経った。今日も天気は快晴。変わらない海の上をツーヴェ号が進んでいく。ふと、帆柱の上の展望台にいる大男の船員ジルドが甲板に居るサラサに向かって手を振った。

「頭あ、島が見えてきやしたあ！」

「方向は？」

「南西です！」

サラサは分かったと手を振り甲板にいる船員達に声をかける。

島に着陸する、急ぎ準備を整える。

そう言うと船員達は蜘蛛くもの子を散らすかのごとくあちこちに走って行った。

その時、甲板から船内へと続く扉から由来とノルフエが出てきた。

歳が近いのだろう。2人で居るところをよく見かける。乗員の中で由来は最年少だった。

きつと、歳が近い者が居て嬉しいのだろう。

「サラサ、島に着いたらノルを海の中に連れて行っても良い？」

「ナクルの許可は得たのかい？」

「近くだったら良いって、兄ちゃん言ってた」

「そう。なら、思い切り遊びな」

少し口元を綻ひらばせて、ノルフエは頷いた。

島が近くに見えてきた頃、サラサは船長室に入り、机の上に海域地図を広げた。

あの島はおそらく無人島だ。誰も居ないはずだから、一晩あそこで

船を止めよう。

【アフエラン国】で仕入れた食料は肉や果物、清水が殆どで、魚は仕入れていない。

生の魚は腐りやすいから、長くはもたないからだ。

あの島で魚を獲ることは出来るから、今晚は魚を使おう。

不意に、ガクン、と船が止まった。少しして、外から碇を下ろしたと声が聞こえてきて、サラサは地図をしまい部屋を出ようとした。出る寸前、サラサは壁際の一角を見やり、微かに眉根を寄せた。

「・・・・・・・・」

少しの間だけその場に立ち止まったが、外から自分を呼ぶ声が聞こえて、何も無かったかのように自室を出た。

「頭、見たところ無人島のような・・・」

「無人島だよ。今日は一晚ここに船を止める。各自夕食の材料を獲ってくるように！」

へい！と声を揃えて船員達はぞろぞろと船から無人島に着地する。

サラサも砂浜に足をつけ、ひとつ息を吐く。

向こうの海岸では由来とノルフエが海水に浸ひたっている。初めての海にドキドキしていながらも、ノルフエの表情はどこか楽しげに見えた。

そこでふと、サラサは周りをぐるりと見回した。ナクルの姿が見当たらない。

船内にでもいるのだろう。そう思いサラサは踵を返した。

4章【無人島で】（後書き）

5章に続きます。

## 5章 【互いの探すもの】（前書き）

前半ナクル視点、後半はまあ3人称です。

ナクルとノルフエ、サラサの過去がほぼ（？）分かります。

## 5章 【互いの探すもの】

船室の窓から、広大な海が広がっている。

ノルフエは由来という少女と一緒にいるから取り敢えず安心だ。

俺はただ1人、船に残って窓の外をぼんやりとみつめていた。外に出るのが嫌というわけでは無い。ただ、こうやって1人で居たい時もある。

だが、こういう時は決まって、過去を振り返っている。

俺達は【ヤツソ国】という国で生まれた。

これは、皮肉なのかそうでないのかは俺自身にもわからない。

俺とノルフエは、その国の貴族に生まれた。裕福だが、領地の民からも慕われた貴族だった。

どこで歪んでしまったのだろう、と今でも思う。

コーレア家が崩壊したのは、あつという間だった。

他国からの襲撃しゅうげきで、両親は死に、俺と弟は奴隷として【アフエラン国】に連れて行かれた。

幸運だったのは、2人一緒だったということ。もし離れ離れになっていたら、俺は必死であいつを探していただろう。

俺がノルフエを守る理由は、2つ。

1つは、弟だから。兄としての役目は、弟を守ること。兄弟だから、当たり前。

2つめは、どうしても行かなければならない所があるから。そこにノルフエを連れて行かなければならない。両親が死ぬ間際、俺に言った。

『すいげんきよつ水幻郷に、ノルフエを連れて行け。あの子は、龍の使い手。必ず、あの場所にあの子を導くのだ』

ノルフエをなぜ龍の使い手と言ったのかは当時の俺でも理解できた。母の腹から生まれ出たノルフエの眼は、碧だったからだ。だがその碧の眼は半年もすると色を失った。けれど、指輪として彼の傍らに置いてあったのを、今でも鮮明に覚えていてる。

あれ以来、あの指輪は片時かたときもノルフエの傍から離れたことは無い。水幻郷という所が何処にあるのかは知らないが、あの場から逃げられたことは嬉しかった。

ふと、扉を叩く音が聞こえた。軽く返事を返すと扉が開き、サラサが入って来た。

「外に出ないのか？」

「……あと少しだけここにいる」

だが、サラサは壁に寄りかかってこちらを見ている。出て行く気はなさそうだ。

「……不意に、訊いてみたくなった。

彼女達は海賊だ。海賊なら、水幻郷の場所も知っているのではないだろうか。」

「ひとつ、訊きたい事がある」

「なんだい？」

「水幻郷という場所を、知っているか？」

水幻郷？と聞き返して、しばらくの間彼女は黙り込んだ。どうやら、知らないようだ。

「……知らないなら、いい」

「あんだ、その場所に行きたいのか？」

「まあ、な……」

ふうん、と短く相槌あいちを打って、サラサは壁に頭を預ける。そして何かを思い出したかのようにあ、と声を漏らした。

「もしかしてそれって、龍と関係あるかい？」

「っ?!」

突然の発言に、ナクルは驚き、眼を見開く。

少して頷くと、今度はサラサが眼を見開いた。

「じゃあ、あんだもあそこに行きたいんだね」

「も?」

聞き返すと、サラサは頷き、腕を組む。

「前に、あたしは探し人がいるって、言ったよな？」

「ああ」

「………3年前だ」

ぼつり、とサラサは呟く。それから自分の過去を話し始めた。

湖に囲まれた国【ワールム国】で、サラサは生まれた。

3年前のある日の晩、サラサは森の奥である人を失った。

その人が居なくなる間際、巨大な龍が見え、突風とつぱうが過ぎたときには、その人は龍と共に姿を消していた。

サラサの話を聴き終えてから、ナクルも自分の過去を彼女に話した。互いの過去が話し終わった後、サラサはひとつ息を吐き出す。

「あたしもあんたも、向かう場所は同じって訳だ」

「そうだな。・・・ところで、その人は、あんたのなんなんだ？」

ナクルが問うと、サラサは微かに苦笑して大切な人だよ、と言った。

「ま、その水幻郷つてのがどこにあるのかを先に突き止めないとね」  
「同感だ」

ナクルがそう言った直後、きゅうう、と腹の鳴る音が聞こえた。

その音は、2人の腹から聞こえてきた。

顔を見合わせて、声を上げて笑った。外を見るともう夕暮れだ。夕食にしてもおかしくはない。

「行こうか」

「ああ」

2人は船室を出て、とっくに夕食の用意をしている船員達の元へ向かった。

5章 【互いの探すもの】（後書き）

何か長いようなそつでないような・・・

## 6章【碧の指輪】（前書き）

サラサと由来の関係が分かりますよ〜^^

## 6章【碧の指輪】

宵闇よいやみの空に無数の星屑ほしくずが散りばめられている。

その下。誰も住んでいない無人島の砂浜に、サラサ達は焚き火を囲んで夕食を食べていた。

自分のご飯を食べ終えると、サラサは顔を上げてツーヴェエ号の船員とナクル達を見回す。

「皆に、知らせておくことがある」

その言葉を聞いて、それぞれ自分の分の夕食を食う手を止めた。皆一斉にサラサを見ている。

「何すか、頭？知らせておきたいことって・・・」

「この海賊は、ある目的があつてこの大海原おおのうらなを旅している。そのことは、あんた達もよく知っているよね？」

「おうよ！俺等は頭の為にサ・カジユ＜良き海賊＞をやっているんだからな！」

そうだそうだ、と他の船員も頷く。由来も、サラサを見て軽く頷いた。

「これから、水幻郷すいげんきょうという所を探す。何処にあるかは知らないけど、必ず其処を突き止めなくちゃならないんだ」

真剣な表情で、サラサは言葉を紡ぐ。

その言葉を、焚き火を囲んで船員達は同じく真剣な表情で聞き入っていた。

「ここから先、立ち寄った街で水幻郷に関する情報も集める事。後、海の異変にも気をつけるように。水幻郷が陸の上にあるとは、限らないからね」

「海の異変に関しては、私が仕切るわ」

「よろしく、由来」

この時、ナクルは呆然ぼうぜんとした。

さすが、海賊の頭というだけのことはある、と思った。

素早い頭の回転と、船員達をまとめるだけの行動力が、彼女には備そなわっている。

隣に座っているノルフエもそう思ったのだろう。目を見開いて、彼女を見ている。

「……兄ちゃん、サラサさん、凄いね」

「……そうだな」

焚き火を消し、皆船内に戻った後。ひとり甲板の上に佇んでいた由来は、心地よい夜風よかせに当たり、その空気に耳を澄ました。

彼女は、生まれつき風詠みの能力ちからが十分に備わっていた。

サラサと同じ【ワレム国】出身の由来は、サラサが誰を探しているのか。その者とはどういう関係なのかも、知っていた。

ツーヴェエ号内で、サラサの事をよく知っている人物は、由来だけだったのだ。

「……異風いふうは、無いみたいね」

ポツリと呟き、由来は船長室に向かった。

船長室に入ると、由来はビックリした。何せ、サラサ以外に、ナクルも居ただけから。

取り敢えず、サラサに異常は無いと知らせてから、ナクルを見上げた。

その視線に気付いたのか、ナクルも由来を見やる。

「ナクルさんも、水幻郷に係わっているんですか？」

「実際に係わっているのは、ノルフェの方なんだってさ」

「……あいつを、あの場所に連れて行かなければならないから、な」

「どうして？」

由来が問うと、ナクルは束の間黙り込んだ。

少しして、口を開く。

「あいつが持っている碧の指輪が、証拠だ」

それだけ言うと、ナクルは船長室を出て行った。

由来は、サラサを見上げた。

「何でも、その指輪が水幻郷にいる龍と関係しているらしくってね」

「龍？」

「そうさ。それも、巨大な……ね」

「でも、何故？そもそも、水幻郷なんて場所、本当に存在するの？」

「さあ、どうだろうね」

苦笑し、サラサは肩を竦める。

由来とて、本当に水幻郷が存在していない、なんてことは思わなか

った。

何せ、海は広い。大陸だって、広大にあるのだ。完全に無いとは言い切れない。

「……もしかして、その場所にアリアさんも？」

「……さすが由来。鋭いね。……最も、確立として、だけれど」

アリア。サラサの大切な人。彼女が探している人。

由来も、何度か彼女と会っている。

サラサと同じ色の髪と眼の色。性格はサラサと違うけど、アリアはサラサをとて大切にしていた。

由来は、サラサが海賊をやると言った時、止めなかった。逆に、一緒に行くと言った。

元々、風詠みは森や平地より、海のほうが大いにやり易い<sup>やす</sup>のだから、今こうして傍に居る。

「……もう遅い。眠りな、由来」

「そうするわ。おやすみ、サラサ」

船長室を出て、由来はふと夜空を見上げた。

無数の星屑と、青白く光る月。

心地よい夜風は安心をくれる。

由来は微かに眼を細めて、少しの間夜空を見続けた……。

## 7章【紅い眼の籠】（前書き）

本編から少し離れるかも……です。  
えーっと、ノルフェの夢の中の話です。  
ノルフェ視点です。

## 7章【紅い眼の龍】

サラサさん達から借りた船室で、ぼくは1人ベッドの上でハインという船員さんから借りた本を読んでいた。

ハインさんはサ・カジユく良き海賊>になる前は本屋で働いていたらしく、自室にも本がたくさん置かれていると言っていた。

借りた本は、昔話のような感じで、とてもおもしろかった。

一通り読み終わると、ぼくはベッドに寝転ぶ。

兄ちゃんはサラサさんのところに行くと言って、さっき部屋を出て行った。

先に寝ていてもいい、と言われたので、ぼくは眠ろうと眼を瞑った。

声がする。

とても、低くて。

でも、何だか落ち着く声だ。

眼が、見えた。

その眼の色は、とても……紅かった。

それは、ぼくよりずっと大きくて。

そもそも、人の形をしていない。

それは……巨大な、龍。

「彼」は、まっすぐにぼくを見据みすえていた。

「……主あるじ」

「君は……誰？どうしてぼくを主と呼ぶの？」

「あなたは、われ我の主たる証拠しやうこを生まれながらに持っている」

その言葉に、ぼくははっとした。

その証拠……。

口に出さずとも、分かっていた。

きつと、あの指輪だろう。

けれど、その指輪は今、ここにはない。

「……君は、どこに居るの？」

「水幻郷すいげんきやう」

「どこにあるの？」

「彼」は、水幻郷の在り処を言った。

その直後、ぼくはまばゆい光に包まれ……眼を覚ました。

「……起きたか」

「……………兄ちゃん」

もう、朝だった。少し揺れているから、もう出航したのだろう。ゆっくりと起き上がると、僕の頭をくしゃりと兄ちゃんが撫でた。

「もう少ししたら朝食だ」

「うん、分かったよ。兄ちゃん」

少し笑って、兄ちゃんは部屋から出て行った。

残されたぼくは、壁かべに背を預けてぼんやりと窓の外を見つめた。

知らない間に、あの指輪を握り締めていた。

それを見て、ぼくはあの時「彼」の言った言葉を思い出した。

『水幻郷は、「ソナムル海」と「ラーゼド海」、そして「亡海」ほしかいの間。  
間。

紅き月浮かぶとき、道は開かれん』

全ては、碧の指輪が知っている……………か。

## 8章【大帝国ラフラゾン】

帆柱の展望台で、由来は彼方かなたまで続くソンムル海を眺めていた。

先日、頭であるサラサから海の異変を感じたらすぐ報しりせるようにと命じられ、由来はこうして海を一望できるこの展望台からソンムル海を眺めているのだ。

この方が、風に当たりやすい。

「異風いふうは無いわね。……そつちはどう？ なにかあつた？」

「特に何も……。にしても由来。ノルフエ坊と一緒にいなくてもいいんすか？」

双眼鏡を手に、トルテは甲板にいるノルフエに視線を落とした。

甲板の端つこの方にひとり佇たたずんでいるノルフエは、どこかぼつとした感じだった。

由来は彼の方を振り向かないで言葉を紡ぐ。

「今朝からずつとあの調子よ。朝食は食べたんだけどね」

「心此処にあらず……。……って事すか？」

「なにか考えてることがあるんでしょう？ それより、ほら、サボらない」

「へーい」

再び双眼鏡で海のほうを見やる。

由来も頼杖ほろつえについて海を眺める。

5分もしない内に、トルテがあつ、と声を上げる。そして、甲板にいるサラサに向かって叫んだ。

「姐あねさー！ ん！ 陸が見えてきやしたあ！」

「方向は？」

「東の方向！距離はおよそ5〜10k！」

分かったという様にサラサは手を上げ、船内に入って行った。

由来はトルテから双眼鏡を借り、その陸がある方に向けた。

確かに、陸地が見える。

双眼鏡をトルテに返すと、由来はするすると甲板に下りていった。

船長室に入った由来を、サラサは一瞥して再び机上の地図に眼を向けた。

「どの辺？」

「・・・由来。あの陸で3日ほど船を止める」

「どうして？」

「情報を集めるには、うってつけの場所だからさ」

そう言うと、サラサは地図をしまつて部屋を出た。由来も後を追う。甲板に出たサラサは船員達に上陸するよう命令し、甲板の舳先に立った。

由来は、彼女の後ろ姿をしばし見つめた後、自分も上陸の準備をするべく持ち場に向かった。

【大帝国ラフラゾーン】は、まさに大帝国と呼ぶにふさわしいところだった。

上陸したサラサ達は【アフエラン国】のときと同じように手分けして食料や情報を集めに散らばった。

サラサはナクルと、由来はノルフエとハインと共に街に行った。

「ここは、陸軍・海軍共に優れた人達が集まっているんだよ。人口も大きいから、こつやつて街も栄えるのさ」  
「初めて来る土地だが……凄いな」

サラサは、ナクルに街の事を教えながら、歩いた。ふと、ナクルは丘の上にそびえ立つ建物を指差す。

「あれは、城か？」

「“トーレイ城”さ。あそこに、王が住んでいる」

近くの店で焼き菓子を買、1つをナクルに渡す。受け取ったナクルはその焼き菓子を一息食べたたん、サラサが立ち止まった。

ナクルも足を止め、サラサを見やる。

「どうした」

「……検問さんのお出ましたよ」

眉根を寄せ、サラサは一点を見つめる。

その視線を追い、ナクルは前方を見ると、いかにもこの国で地位の高い者数人がこちらに歩み寄って来た。

サラサ達の前で立ち止まると、数人（とは言っても3人）のうち1人が一歩前に出てサラサ達を睨んだ。

「そなた等、サ・ヴァロンく悪しき海賊か？」

「サ・カジユく良き海賊の者だ」

中々信じられないのか、男はふんつ、と鼻で笑う。後ろの男2人も、顔を見合わせている。

「サ・ヴァロン＜悪しき海賊＞の者は、罰せられるのが嫌でサ・カジユ＜良き海賊＞を名乗る。よくある口実だ」

「俺達は、そう易々と騙されたりはしないぜ」

「検問所に来てもらおうか」

男の1人がサラサの腕を掴んだ。

刹那、男達の後ろから声がした。

「阿呆。よく調べもしねえで、検問所に連れてく馬鹿がいるか」

現れたのは、日に焼けた青年だった。髪は黄色く、眼は黄緑だ。

彼を見てサラサは更に眉根を寄せる。

男達は青年を見て驚愕の表情になり、サラサの腕を掴んでいる男は手を離し彼に向き合った。

「ウィル將軍！しかし、最近ではサ・ヴァロン＜悪しき海賊＞がサ・

カジユ＜良き海賊＞を名乗る件が多く発生しております・・・っ」

「それは俺も知ってる。だが、本当にサ・カジユ＜良き海賊＞の奴等を疑ったら、そいつ等に申し訳ないだろ？・・・ムト！」

ウィルと呼ばれた青年は、後ろにいるムトという側近を呼ぶ。

ムトはウィルに1枚の紙を渡した。

それに目を通したウィルは男達を見やる。

「そいつ等は真正銘のサ・カジユ＜良き海賊＞だ。証拠ならあるぜ？見てみるか？」

「い、いえ、とんでもありません！ウィル様がそう仰るのであれば、そつでございましょう！」

「お前等は西の森の警護にあたれ。あの辺の海岸沿いになら、サ・ヴァロン＜悪しき海賊＞がいる可能性があるぜ」

「はっ！」

駆け足でその場を去っていく男達を見送った後、ウィルはサラサ達を見下ろした。

「さて。．．．あんた達、このラフラゾーンでお求めの物は？」  
「人探しだ」

短く、サラサは答える。

ウィルは軽く眉を上げ、へえ、と呟いた。

「まあ、さっきの奴等の変わりに俺が謝っとくよ。悪いな、部下が失礼な事して」

「別に。慣れているさ。それより、『アルメドの戦士団』が今どこにいるか知らないかい？」

『アルメドの戦士団』と聞いて、ウィルと側近のムトは目を見開いた。

『アルメドの戦士団』とは、【大帝国ラフラグーン】が誇る最強の騎士団の事だ。

男女関係無く、強いものは採用される。

「あんた、あの中に知り合いでも？」

「まあね。．．．で、どこにいる？」

「えーっと．．．．．」

頭をくしゃりと掻き、ウィルは空を見つめた。覚えていないのだから。

代わりに、側近のムトが口を開いた。

「『アルメドの戦士団』は現在、トーレイ城付近の森にいます。ただし、今は稽古中。伺<sup>うかが</sup>うのは夕方の方が良いかと……」

「そっか。ありがとよ。じゃあ、この辺で……」  
「頭！」

人込みを掻き分けて、由来達と一緒にいたはずのハインがこちらに走ってきた。

サラサの前で乱れた息を整え、顔を上げた時、サラサは顔を強張<sup>こわば</sup>らせた。

ハインの右頬が、赤く腫れあがっていた。

「ハイン、その頬はどうした？由来とノルフエは？」

「頭、大変だ。由来とノルフエが、連れて行かれちゃった！」

「なんだって?!?!」

## 8章【大帝国ラフゾーン】（後書き）

やっと(?) 8章終わったあ・・・。

なんか自分で書いてて長いと感じたよ、(うん

次回も長いかな・・・多分長いなあ。

## 9章【アルメドの戦士団】

「それで、誰に連れ去られたんだ？」

「3人の男等です。1人は右腕に刺青いれずみをしていました」

街並みから離れた場所で、サラサとノルフエはハインの話聞いていた。

なんでも、襲ったのは盗賊の一味で、先に向こうが絡んできたらしい。

ハインは由来とノルフエを守ろうとしたが、3対1ではまず勝てない。

氷水で赤く腫れた頬を冷やしながら、ハインは申し訳なさそううつつむに俯いた。

「すまねえ、頭、ナクル。俺が付いていながら、由来達を……」

「悪いのは盗賊であつて、あんたじゃない。心配するな、由来とノルフエは必ず取り戻す」

「あ、こんな所にいたのか」

軽く片手を挙げながらやってきたのは、先程街さきほどで出会った青年のウイルと、その側近であるムトだった。

近くまで来ると、ウイルは一枚の紙をムトから受け取った。

「あんた達の連れを攫さらった盗賊は、いまだ国内にいるらしい。……

ま、俺等が何とかしてやる。だから船で待つて……」

「場所は特定できているのかい？」

「あ、ああ……」

「地図を貸してくれ。あたしが行く」

いきなりの発言に、その場にいた者はみな、驚いた。ウイルはぼかん、としてサラサを見下ろしている。最初に口を開いたのは、ムトだった。

「危険です！盗賊ですよ？下手へたをしたらあなたまで殺されてしまいかもしれない！」

「由来とノルフエはあたしの船の乗員であり、仲間であり、『家族』だ。わざわざ国のお偉いさんに助けてもらう必要なんてないね」

「しかし・・・っ」

「地図を貸しな。あたしは1人であの子等を助けに行く」

これだけは絶対に譲らない、といった感じで、サラサは引き下からなかった。

仕方なく、ムトはサラサに盗賊のいる場所が示してある地図を渡す。サラサは1人森の中に入って行くが、すぐに引き止められた。

「俺も行く。ノルフエを助けない」

「あんた、戦闘術は？」

「護身術なら、少し」

「はあ・・・。傷だけは作るなよ？ノルフエが心配するからな」

「俺も行くぜ。余所よそさんに悪い奴等取り締まられたら、何のために将軍おれがいるかわかんねえからな」

「じゃ、援護は頼んだよ、将軍さん」

3人は、盗賊がいると思われる森の奥に向かって走り出した。

「あそこか？」

「間違いない。あの小屋だ・・・見張りがある」

盗賊がいる小屋の周りには見張りと思しき者が2人いる。  
小屋から少し離れたところで、サラサ、ナクル、ウィルは茂みの陰に隠れていた。

「よし、じゃあこうしよう。俺とナクルは見張りを、サラサは裏口があるからそこから中へ」

「了解」

小屋の入口付近で、2人の男は地べたに座ってタバコを吸いながら辺りを見回していた。

2人の内1人は、由来とノルフエを連れ去った3人のうちの1人で、肩に刺青いれずみをしている男で、もう1人は盗賊なのかと疑うくらいに痩せた男だ。

「あーあ、暇だなあ！」

「にしても、あんなガキ連れてきて、金とか持ってなさそうっすよ？」

「バーカ、市場で売るんだよ。あーいうのは、奴隷が似合うからな」  
「そりゃあいい！」

ガハハ、と大口おおぐちを開けて笑う。

が、不意に痩せた男の笑い声が途絶えた。不思議に思って隣を見た刹那、鼻先にピタリと鋭利えいりな物が当てられた。

視線をわずかに上にあげると、そこにはにつこりと不気味ぶきみに笑う青年が立っていた。

その青年を見たたん、男はひいつ、と小さく悲鳴をあげた。

【大帝国ラフラゾーン】の将軍、ウィルⅡリバスだ。  
サ・ヴァロン<悪しき海賊>の取締りをする将軍。

だが、彼はそれだけでなく、盗賊などの取り締まりもするという。。  
その将軍が、いま、目の前にいる。男は、青ざめた。  
痩せた男の方は、ナクルが気絶させていた。

「へえ、結構見事だな」

「目を離してて良いのか？逃げるぞ」

「平気だって。逃げたら捕まえるまでだし」

視線を男に戻し、ウイルは男を睨みつける。

「あんた等が攫った子供2人、返してもらおうか」

「・・・・・・・・・・っ」

有無<sup>うむ</sup>を言わさない迫力に、男は目を見開いた。

その時、ウイルは自分に向かって何かか飛んでくるのを察し、飛び退く。

地面に突き刺さったのは、小さな刀だった。

森の方から、4人の男が現れた。

ウイルは、小さく舌打ちした。

「厄介だな・・・・・・・・フツー見方ここで現れる？」

「・・・・・・・・・・どうする？」

2人は緊張した表情で、現れた味方を見つめた。

一方、小屋の中にいる由来とノルフエは、裏口から入ってきたサラサに助けられていた。

怖かったのか、2人ともサラサにしがみ付いている。

いくら由来といえど、まだ子供だ。怖がりもするだろう。

しがみ付いている2人の背中をさすりながら、サラサは自分が倒した男2人を見やる。

2人とも、完全に気を失っていた。それもそのはず。サラサは不意打ちで彼らを気絶させたのだから。

「さ、あんた達。もう大丈夫だから。どこか痛いところはないかい？」

「私もノルフエも平気よ」

「サラサさん、兄ちゃんは・・・っ」

「街で会った將軍さんと外で待っているよ。さあ、行こう」

小屋の戸を開けたとたん、サラサは2人を背に隠した。

小屋のあたりには、数人の男がこちらを睨んでいる。

こちらに気付いたのか、ナクルが振り向いた。

「ノルフエ、無事だったか？」

「兄ちゃん・・・っ」

「ナクル、ノルフエと由来を頼んだよ」

彼に2人を預けると、サラサはウィルの隣に立った。

腰から短剣を出すと、スツと構えた。

両方、にじり寄る。

「あたしはこっちの3人をやる。あんたはそっちの2人を頼む」

「援護は？」

「いらない」

「りよーかい」

高く、2人はジャンプした。

左右に分かれて着地し、目の前の盗賊やいばに向けて刃を振り下ろす。

刃の背を使つて、相手を気絶させようとするが、向こうも盗賊だ。簡単にはいかない。

辺りに気を配らないで集中している内に、ふと気付いた。

いつの間にか、人数が増えている。6人、いや、その倍以上いる。まずい。そうサラサが思った次の瞬間、声が響いた。

「そこまでだ！盗賊どもよ、一歩たりともそこを動くな！」

女性の声だった。その声を聞いた方を見て、盗賊は硬直した。

サラサやウイル、ナクル達も声のした方を見ると、馬に乗り、刀を構えた者が数人こちらを見ていた。

それを見た盗賊の1人が、掠れた声かすで言った。

「『アルメドの戦士団』……………」

## 9章【アルメドの戦士団】（後書き）

やっと(?)終わりました！（この章が）

この調子で次章も頑張って生きたいと思います。

もし宜しければ感想などお待ちしています^^

## 10章【昔馴染み】

由来とノルフエを連れ去った盗賊は『アルメドの戦士団』によって身柄を拘束され、検問所に連行されていた。

『アルメドの戦士団』は一隊15人いる、とウィルはサラサとナクルに教える。

ノルフエはナクルにしがみ付き、隣にいる由来と少し話をしている。サラサは『アルメドの戦士団』の戦士達をじっと見つめていた。

リーダーと思しき者が馬に跨ったまま、こちらにやって来る。

その者は、女性だった。

きりつとした眼に、短く切った髪が風で少し揺れる。

彼女の傍らにもう1人、女性がやって来た。

優しい笑みを浮かべて、サラサ達を見やる。

「あなた達、もう大丈夫よ。安心して」

笑みを浮かべながら、女性は言った。

リーダーらしき女性はサラサをじっと見つめ、やがてフツと笑みを浮かべる。

「久しいな、サラサ。6年ぶりだというのに、変わらぬな」

「ああ。あんたも変わっていないね、リオナさん」

知り合いなのだろうか、2人以外の者は全て目を丸くした。

「サラサ、知り合い？」

由来が問うと、サラサは頷いた。

一番驚いているのはもう1人の女性と、ウィルだった。  
ウィルはリオナと呼ばれた女性とサラサの間に割って入る。

「ちょ、リオ姉ねえ！俺知らねえよ、そんなこと！」

「当たり前だ。お前には知らせていないからな」

「ひどいって……」

がつくりと肩を落とし、ウィルはサラサを見やる。

サラサは眉根まゆねを寄せていた。

ウィルはしばらく何かを考え込むように指で額を押さえていたが、やがてはつとずる。

「もしかしてあんた、リオ姉を探してた？」

「ああ、そうだよ。あんた、リオナさんの弟？」

「まさか。私に弟なんていたらとつくに『アルメドの戦士団』に入団させている」

ウィルの代わりにリオナが答える。

嫌なのか、ウィルは首を横に振っている。

リオナは馬から飛び降りると、何故かもう1人の女性も飛び降りる。  
リオナはサラサの後ろにいる3人を見て、口を開いた。

「初めまして、私はリオナ」ロダット。『アルメドの戦士団』だいち 第壹だいいち部隊長ぶたいちやうだよ。因みに、彼女はローア。私の部下だ」

「こんにちは、ローアです」

まるで戦士ではないかのような雰囲気ふんいきを漂ただよわせ、ローアは微笑む。  
ナクル達も彼女達に自己紹介をする。

ふと、リオナは何かを思い出したかのように口を開く。

「因みに、ここにいるウィル」リバーズ将軍殿は、一応私の従弟だ」  
「一応ってなんだよ一応って！ひっでえ」  
「ところでサラサ、どうしてお前がここに？」

ウィルの話をスルーし、リオナは首を傾げる。

サラサは一瞬表情を曇らせ、口をつぐんだ。

その意味を察したのか、リオナはローアに何かを言うと、後ろに控えている部下達を振り返った。

「盗賊どもは牢に入れておけ。私とローアはメーデル屋敷に向かう。  
夕刻まで好きにしてよい。解散！」

部下達がいなくなると、リオナはサラサに微かに微笑む。

「事情は屋敷で聞こう。そなたらも、来るといい」

「俺は？」

「将軍殿には書類があるだろう」

「ああー！そうだった！」

「では行こう。ローア、先導を頼む」

「わかりました」

ローアが馬に跨またがって、歩き出す。

リオナは馬には乗らず手綱たじなを引いてサラサ達と共に歩き出した。

残されたウィルはしぶしぶと反対方向に去って行った・・・。

## 10章【昔馴染】（後書き）

なんだか自分で書いててウィルが空しくなってきた（

## 11章【龍の使い手】

「着きました、モデル屋敷です」

目の前に建つ屋敷を見て、サラサとリオナ以外の者は呆然ぼつぜんとする。いかにも、お金持ちのお屋敷だ。ナクルとノルフエは元々貴族だったが、この屋敷はその倍近くある。迎えに来たらしい屋敷の者達が、リオナとローアの馬を厩うまやに連れて行く。

「ローアさん、この屋敷は？」

由来ゆいが問うと、ローアは微笑んだ。

「ここは私の屋敷です。客間にご案内しますから、付いてきて下さい」

ローアが進むと、後からサラサ達も進んで屋敷の中に入っていった。

客間はとても広かった。

天井には豪華なシャンデリア。

ふかふかのソファ。

赤や白などのバラ。

まさしく、お金持ちの家そのものだ。

ソファにそれぞれが座ると、リオナが口を開く。

「それで、サラサ。ここへ来た理由は？」

「あんたに、訊きたい事があるからさ」

向かい合って座っているリオナの肩が、ピクリと動く。

ナクル、ノルフエ、由来、ローアは、2人をただ見ていた。

「水幻郷すいげんきょうにいる龍について、何か知っていることはあるかい？」

「水幻郷？そなた、あの場所に行くというのか？」

「知っているんですか?!」

口を挟はんだのは、ノルフエだった。

リオナは頷き、話を進める。

「水幻郷は、古い言い伝えでしか存在しない場所だ。150年前に、この地から無くなられたはず。……今もあると言っのか？」

「確かな証拠しんこは掴つかんじやないけど、あるよ」

「……少年、水幻郷の龍を知っているか？」

リオナはノルフエを見、問うた。

ノルフエは微かに頷いて、碧の指輪を皆に見せる。

「夢の中で、会ったんだ。その時、龍は水幻郷への行き方を教えてくれた」

「そなた……っ、その手の中にあるのは指輪か……っ」

目を見開き、リオナは問う。ノルフエが頷くと、彼女は眼を細めた。

「まさか、この眼で龍の使い手に会えるとは、な」

「龍の、使い手？」

「ああ。……ローア、R、150の資料を持ってきてくれ」

「はい」

ローアは立ち上がって客間を出た。  
リオナは再びノルフエを見やる。

「古代、人の中に龍の使い手という者が少なからず居た。  
彼らは生まれつき、何かしら碧のモノを持っている。

龍の使い手は、水幻郷への道を開き、龍達と交流していたのだ。  
多分、そなたもそうであろう」

「じゃあ、ノルフエが、水幻郷への行き方を知っている。  
そう言いたいのか？」

頷き、リオナはソファの背凭せもたれに寄りかかる。

サラサは俯いて何か考え事をしている。

束の間の沈黙は、由来の声で終わった。

「ノルフエ、水幻郷への行き方、知ってる？」

「微かにだけど、覚えてるよ」

「どんな？」

「えつと……」

## 11章【龍の使い手】（後書き）

まだこの章は続きます。

微妙なところで途切れてサーセン……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4687j/>

---

海上日記

2011年1月28日15時25分発行